

聖書：コリント人への手紙第一 15：1～11

説教題：最も大切なこと

日時：2023年1月22日（朝拝）

コリント人への手紙第一も残すところあと2つの章となりました。これまでいくつもの山を何とか乗り越えて来ましたが、最後に待っている大きな山がこの第15章、復活に関する章です。これまでイースター礼拝で、この章の中からいくつかの箇所を取り上げたことはありますが、聖書に従って順番に前から読むことによって見えて来るメッセージを探り当てることができればと願っています。

さてなぜパウロはここで復活について話し始めたのでしょうか。その理由は次回の12節を見ると分かります。コリント教会の中にはキリストの復活は受け止めつつも死者の復活はないと主張する人たちがいたようです。彼らがどういう理屈でそのように考えていたのかははっきりしないところがありますが、とにかくある者たちは死者の復活はないと主張していました。そんな彼らに対してパウロはこの15章で、もし復活がないとしたら私たちの信仰はむなしなものになると言います。キリスト教は十字架の宗教であるばかりでなく、それに劣らず復活の宗教でもあるということを語って行きます。

今日見る1～11節はその議論をこれから展開するための土台となる部分です。パウロは1節で「兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます」と言います。コリント人たちはすでにこの福音をパウロから伝えられ、知っていました。その福音と彼らの関係がここで3つの言葉で表現されています。まず一つ目は「あなたがたはその福音を受け入れ」。これはギリシャ語で不定過去と呼ばれる時制で書かれています。不定過去とは過去のある時点でなされた決定的な行為を指す時制です。つまりコリント人たちはパウロの宣教を聞いて過去のある時点で決定的に福音を受け入れるという応答をしました。二つ目は「その福音によって立っている」。こちらは完了時制で書かれています。これはある過去の時点からその状態が継続していることを指す時制です。つまり彼らは一つ目で見た福音を受け入れるという決定的な応答をしたばかりでなく、それ以来ずっとその福音に立ち続けています。そして三つ目は2節にある「この福音によって救われます」ということです。日本語訳では分かりにくいのですが、原文では1節と2節は一つの文章であり、しかも「この福音によって救

われ」という部分は2節の最初に出て来て先の二つの言葉と連続しています。ですからこの三つの表現はセットになっていると考えられます。そしてこの三つ目は現在時制で書かれています。そのニュアンスは日々救われるプロセスのただ中にあるということです。私たちはしばしば信仰を持った時のことを「救われた」と過去形で表現します。ある意味で信仰告白をして、神の前に罪を赦され義と認められたことを指して、そのように表現することができます。しかし当然のことながら救いの最後の状態に到達したわけではありません。そういう意味ではまだ救われていないということもできますし、最後の状態に向かって現在救われつつあるという言い方もできます。ここで述べられているのはこの最後のニュアンスです。私たちは日々救われて行くというプロセスのただ中にあります。そのように私たちを導くのも福音であると言われていま

そのことと関連して大事なことをパウロは2節の残りの部分で語ります。まず「私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら」と。ここの「しっかり覚えている」と訳された言葉は「しっかり持っている」とか「しっかり保っている」という意味の言葉です。つまり私たちが福音によって救われ続けるプロセスの中を歩むためには福音をしっかり自分のものとして理解し、それをつかんでいる状態にあることが必要であるということです。ですからパウロはその福音についてもう一度ここでコリント人たちに対して語り直そうとしているのです。

そして2節の最後で「そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます」と言います。ここは解釈の難しい部分です。原文でここは「空しく信じた」という表現になっていて、新改訳2017は「信じたことは無駄になる」と訳していますが、もう一つの可能性として「空しく信じた」という表現を「よく考えもせず信じた」という意味に取ることも可能です。新改訳の第3版は以下のようになっていました。「また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。」こちらの解釈を取る学者たちも多くいます。こちらの場合、良く考えることの大切さが強調されることとなります。そしてあるコリント人たちの問題はそこにあったということにもなって来ます。彼らは確かに福音を聞いて受け入れ、今もその中に立っています。しかしある意味でそれを十分に考えるという点において欠けがあった。その理解が表面的なところにとどまっていた。だからキリストの復活を伝える福音を聞き

でも死者の復活はないと主張していた。そんな彼らにパウロは福音をもう一度語り、その意味するところをよくよく考えるようにと導いて行くということです。福音の言葉一つ一つには素晴らしい含蓄とメッセージがあります。それが意味していることをよく熟考すること、その上でそれを堅く保つこと。そうすることによって日々救われるというプロセスの中を彼らは進んで行くことができるということなのです。

さて3節以降でパウロは福音について「最も大切なこと」を語ります。そのエッセンスとしてここに4つのことが述べられます。これらパウロが伝えたことは、パウロも受けたことであって、全キリスト教会が共通して保持している福音です。その一つ目は「キリストは、・・私たちの罪のために死なれたこと」。キリストの死は自分のための死ではありませんでしたし、単なる偶然の死でもありませんでした。それは私たちの罪のための死でした。私たちの罪の負債を肩代わりして支払う代償的な死でした。二つ目は「葬られたこと」。これは死を確証するものです。この後、復活のことが言われますが、イエス様は決して死にかけたけれども本当には死んでおらず、ぎりぎり息を吹き返したというわけではありません。イエス様は確実に死んだのです。その確証として葬りがありました。三つ目は「三日目によみがえられたこと」。一つ目の死と三つ目の復活については「聖書に書いてあるとおりに」という言葉がついています。これは特にこの二つが重要であることを示してもいるでしょう。ここで言う「聖書」はもちろん旧約聖書のことです。イエス様は復活した当日、エマオに向かって歩く二人の弟子に対して「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのではありませんか。」と言われ、「モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた」とルカの福音書24章27節に記されています。つまり旧約聖書全体にはイエス様が私たちの代わりに苦しんで死ぬことと、復活して栄光に入ることが述べられていたとして、イエス様がそのように解説されたと言われています。同じルカの福音書24章の44～47節でも、イエス様は聖書を悟らせるために弟子たちの心を開いて、旧約聖書にはイエス様のことが書いてあること、そこには「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえる」ことが書いてあるということを教え示されたと記されています。ですから十字架と復活は突然歴史の中で起こったことではありませんし、また後付けで解釈されたことではありません。それは神が旧約聖書において前もって予告して来られた救いの御業の成就でした。そして四つ目に復活の証人としてケファすなわちペ

テロと十二弟子のことが述べられています。

そしてさらに復活の証人がいたことが 6 節以降に記されます。6 節に「キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました」とあります。これはマタイの福音書最後の大宣教命令の時のことだったかもしれませんが、あるいは別の時のことだったのかもしれません。その 500 人以上の主を見た人々の中にはすでに眠った人が何人がいましたが、大多数は今なお生き残っていると言われます。このコリント書はイエス様の復活から 20 年前後くらいに書かれた書ですので、確かに復活のイエス様を見てなお生きている人は沢山いたわけです。さらにその後、ヤコブすなわちイエス様の兄弟でありエルサレム教会の牧師となったヤコブにキリストは現れましたし、すべての使徒たちにも現れたとあります。ここの使徒たちとは十二弟子よりもさらに広い広義の意味における使徒たちを指すと思われます。

そして最後にパウロ自身のことが語られます。パウロにイエス様が現れたのはイエス様の昇天後、あの有名なダマスコ途上においてです。彼はここで自らのことを「月足らずで生まれた者のような私にも」と言います。これはどういう意味でしょう。「月足らずで生まれた」とは期間が満たない内に生まれた者、つまり未熟児のような者という意味でしょうか。他の弟子たちが約 3 年間、主と共に生活して訓練を受けたことに比べてパウロは短い期間しか訓練を受けなかったことを意味するなどと言われることがあります。しかしこのギリシャ語の言葉の意味は「死産の子」とか「流産の子」というものです。たとえば民数記 12 章 12 節に「肉が半ば腐って母の胎から出て来る死人」という言葉がありますが、旧約聖書をギリシャ語に訳した 70 人訳聖書では、ここと同じ言葉が使われています。同じくヨブ記 3 章 16 節や伝道者の書 6 章 3 節に出て来る言葉にも同じギリシャ語が当てられており、いずれも「死産の子」を意味しています。とするとパウロはかなりショッキングな表現を自分に当てはめたことになります。彼は自分を死産の子、流産の子と言うのです。なぜそこまでの言い方をしたのでしょうか。それは次の 9 節にある通り、以前の彼は神の教会を迫害したからです。パウロは使徒の働きや彼の他の手紙に記されているように、以前は熱心に教会を迫害していました。彼としては確信をもってそのことをしていたのですが、それは完全な誤りであったことを後になって愕然としながら知りました。彼は神に仕えるどころか、神に敵対していたのです。そんな自分を振り返って、自分は死産の胎児のような者だと言ったわけです。どうすることもできないもの、死者そのものです。しか

しそのような私にキリストは現れてくださり、「神の恵みによって、私は今の私になりました」と言います。死者が生きる者とされ、さらには使徒とさせられた。パウロが言いたいのはキリストの復活はただそれだけで終わるものではないということです。キリストの復活は、このように私たちに大きな影響を与え、死んでいた者をいのちに生かし、その人生を一変させる力を持っているものであるということです。さらにパウロは「私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました」と言います。一見パウロが自分を誇っているように見えなくもありませんが、パウロはそうでないことを示すため、誤解を防ぐために、10節では前後で3回も「神の恵み」という言葉を連発しています。神の恵みがパウロをこのように導いたということです。もちろんパウロは救いの恵みにあずかって心から感謝して応答したいと願って自分をささげています。しかし彼をこのように動かし、このような働きをなさしめたのはただただ神の恵みなのだ！とパウロは言っているのです。キリストの復活は単なる教理ではありません。それは死んでいた者たちをこのように恵みによって造り変え、日々の生き方に大変革をもたらすものであるということです。この福音をパウロも他の宣教者たちも宣傳伝え、コリント人たちも受け入れました。パウロもコリント人たちも同じ福音に立っています。この共通地盤を確認して、パウロはその福音の意味するところは何かをこれから語るのです。この福音に立つなら、死者の復活がないということにはならない。それはもちろんあるということになりますし、それは私たちに日々大変な希望と力を与えるものでありますし、この福音によって私たちは日々救われて行くということをパウロは語って行くのです。

続くパウロのメッセージを楽しみにしつつ、今日のまとめとして二つのことを短く心に留めたいと思います。一つ目はこのことです。私たちは今日の箇所です。「最も大切なこと」としてイエス様の死、葬り、復活、その証人のことが述べられたことを見ましたが、もしかするとこれを読んだだけでは特別なことは何もないと感じる方がいらっしゃるかもしれません。これのどこが福音なのかと。しかしこれらは単にキリストの地上の生涯にこういうことがあったということだけを語っているものではないのです。これら一つ一つは実は私たちの信仰生活にとてつもない意味を持っています。ですから私たちはこれらを表面的にはなく、これらが意味していることをよく考えたいと思います。ここに私たちの日々の信仰の歩みに大きな意味を持つ深い含蓄があることを覚えたいと思います。この福音をしっかりと保つことによって日々救われるプロセスの中を私たちは導かれるとパウロは言いました。私たちはその福音によって

日々救われ続ける恵みの中を進む者とされたいと思います。

もう一つはパウロの証しから受けるチャレンジです。パウロは「神の恵みによって、私は今の私になりました」と言いました。これは私たちにも当てはまる言葉であるはずです。私たちも以前は靈的に死んでいた者でした。社会的にどんな立派な肩書きを持っていたかは知りません。しかしパウロと同様、神の前に誤っていること、的を外したことのために熱心となり、靈的に死んでいた者たちでした。そんな私たちもただ神の恵みにより、復活のキリストに結ばれて、今やいのちに生きる者、最後の救いに向かっていよいよ確信と喜びをもって生きる者とされました。と同時に私たちが今日の箇所から受けるチャレンジは、パウロが神の恵みによって他の誰よりも多く働いたと言っていることではないでしょうか。そこに復活の力が証しされていると彼は言っています。パウロの働きが偉大なものであったことについては誰も異論がありません。しかし彼はそれは「私とともにある神の恵みである」と繰り返し念押ししています。それは決して取って付けた言葉ではなく、彼が心からそう思っていることです。彼は本当に神の恵みの力に生かされていたということです。パウロをそのように生かし、導いた恵みの神と、私たちが今日信じている恵みの神は同じです。私たちも福音とその含蓄をさらに知って、パウロと同じ神の豊かな恵みの力に生かされたいと思います。キリストの復活は大変なメッセージを私たちに対して持っていることをよく知って、私たちの生活がこの真理とその力に生かされるものでありますように。そして自らの生活をもって、復活の福音の素晴らしさと神の恵みを証しする歩みを、神の御前にささげることへと導かれて行きたいと思います。